

ゆう き りん りん
勇 気 凛 々

源 氏 鶏 太

東 方 社 版

勇 氣 凜 々



(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和三十八年五月十日発行

定価三〇〇円

著 者 源 氏 鶏 太

発 行 者 石 渡 磨 須 子

整 版 者 内 田 柳 次 郎

東京・都文京区高田豊川町六〇
発 行 所 東 方 社

振替東京五七七四番
電話大塚八一八七三番
七〇三六番

(印刷・邦文堂印刷所)

勇氣凛々

源氏鶏太

目次

赤い傘	十年	前途遼遠	勇氣漂々
-----	----	------	------

99	75	43	5
----	----	----	---

	そ	忠	い	女
あ	ろ		び	に
と	ば		き	吹
が	ん		物	く
き	侍	臣	語	風

268 247 201 183 125

裝幀 香月泰男

勇氣凜々

今にして思えば、全く、無茶なことをしたものである。謂わば、汗顔のいたり——。しかし、あのときには、どうしても、ああしないではいられなかつた。常識の発達した大人の眼には、まさに狂気の沙汰、としてしかうつらなかつたろう。事実、多くの人々から、そのように批難された。その批難は、甘受すべきである。

しかし、園井次郎は、自分の青春時代に、ああいう無鉄砲な真似をした、ということをそれほど後悔していなかつた。いや、あの事件があつてこそ、自分の青春時代は、決して、空しいものでなかつたといえるのだ、と思つてゐる。もし、あの事件が起つていなかつたら、本来、華やかな筈の青春の思い出は、忽ち、色あせて、味気のない灰一色に塗りがえられてしまふだろう。勿論、ことの善悪は、別の問題に属する。そして、今でも、園井次郎の胸に、そのため、苦渋の思いが尾を曳くように残つていないとはいへない切れないのである。

だいたい、次郎という男は、變つていたようだ。彼の母親がいつていた話について、その一二を書いてみると——。

次郎が五歳のとき、大正座へ芝居見物に連れて行つた。幕合いに、次郎は、花道へ上つた。そ

ういうことは、どこの子供でもしがちなことである。母親は、黙つて、それを見ていた。そのうちに、次郎は、舞台の方へ、歩いて行つた。それでも、母親は、たいして気にもとめないで、いつしよに行つた近所の人と話をしていた。

突然に、劇場内が騒然となつた。爆笑が起つた。見ると、次郎が、幕を引つ張りながら開いていた。すでに、半分以上を開いていた。幕合ひの長さに退屈していた客は、思わぬ茶番劇に、爆笑のあとに大拍手を送つた。が、いきなり、幕を開かれた役者や道具方たちは、まるで、尻の穴を覗かれたように、大あわてにあわてていた。次郎をおさえにかかつたのだが、なかなか、いうことを聞かない。何んとしても、幕を開き切つてしまふつもりようだ。その気魄が、次郎の全身に満ち溢れていた。客は、ますます、大よろこびをした。

あんまり、物事に動じない性分の母親も、このときばかりは、たまげたのである。咄嗟に立ち上つて、次郎を連れにゆくことが出来なかつた。

やつと、次郎をなだめすかした役者の一人が、彼を抱き上げて、

「これは、どなたのお子供さんですか。」と、本気で憤ることも出来ぬ不機嫌さで、大声でいつた。

母親の方が、真ッ赤になつていた。ケロリとしている次郎を受取りながら、満座の注視を浴び

ねばならなかつた。

「あんなに恥かしかつたことは、後にも先にも、ありませんでした。」

しかし、そのときは、恥かしかつただけですんだが、次郎が、生きている蟻を食べた、と知つたときには、顔色を変えてしまつた。即ち、次郎が、近所の子供と遊んでいて、生きている蟻を食べられるかどうか、の議論をして、

「何んだ、こんなもんぐらい。」

そういうと、そこらを動きまわっている蟻を掴まえては、片ツ端から、むしやむしやと食べはじめたのである。

あとで、相手の子供の母親から、そのことを聞かされた次郎の母親は、青くなつて、すぐに次郎を連れて、医者へ走つた。医者は、何かの白い粉薬をくれて、大丈夫でしょう、といつてくれたが、母親は、次郎の腹の中で、今だに蟻が動きまわっているような気がして、自分の間は、気が悪くてならなかつた。次郎の方が、そのことを忘れて、元気で、遊びまわっているのに。

また、次郎は、水の中に長くもぐっている方法を考え出した。即ち、竹の棒の節に穴をあけて、空気が通るようにし、それを口にくわえて、水中にもぐり、棒の先だけを水面に出しておくのである。それだけなら、どこの子供でも考えることだろう。が、次郎は、呼吸をするときに、鼻か

ら水が入つてくることを恐れた。それで、家から洗濯ばさみを持ち出して来て、それを鼻にはさんだ。ちぎり取られるような痛さを我慢して、水中にもぐり込んだ。しかし、この結果は、あんまりうまくいかなかったらしい。

母親にいわせると、次郎のこういう性格は、彼の父親のそれに似ていたらしい。が、その父親は、次郎が十歳のときに亡くなつていた。次郎の上に、温厚な性格の兄がひとりいたのだが、これまた、次郎が五歳のときに亡くなつていた。父親が亡くなつても、多少の遺産はあつた。次郎は、郷里である北陸のT市の中学を卒業すると、そのまま、T市の高等学校に入学した。

事件は、その高等学校二年生から三年生に進む春休みのときに起つたのである。時に、昭和のはじめ――。

二

春休みでのんびりと過していた同級生の平岡、福島、中屋、谷、そして、米村の五人が、次郎から同文の速達便を受取つた。

「どうか、俺を気遣いと思つてくれるな。俺は、決して、気が狂つたのではない。正気なのである。そして、熟慮を重ねた結果、ついに、彼女を掠奪する決心をした。」

はじめに、そのようなことが、躍動するような字で書いてあつた。ついては、そのことで、相談したいことがあるから、明日の午後三時に、神通川原へ集まってくれ、というのである。

この手紙を受取つた五人には、これだけで、次郎が、何をしようとたくらんでいるかが、よくにわかつた。

「掠奪！」

その言葉は、魅力に満ちていて、若い五人の血をわかしに達しない。もとより、友達の頼みだし、野次馬的気分もあり、それに、場所が、神通川原なら、人眼を忍ぶ謀議のために絶好である。条件が揃つていた。五人は、一人も洩れなく、約束の時間に、神通川原へ出向いて行つた。

当時、高等学校生徒の服装といえは、敝衣破帽と相場がきまつていた。腰に手拭をブラ下げて、朴蘭の下駄を履いていた。

次郎は、草の茂みの中で、腕を組み、深刻な顔をしていたのだが、五人に対して、

「おお、よく来てくれた。」

と、一人々々に、固く、握手をした。

六人が揃うと、その場に円陣をつくつた。橋の上には、絶えず人通りがあるけれども、誰も、こつちを見ていないようだつた。花曇り、とでもいふような空模様であつた。春の微風が、絶え

ず、周囲の葦を柔かく波打たせていた。

「今日は、どうも、すまん。」

先ず、次郎が神妙にいつて、軽く、頭を下げた。

「本当にやる気なのか。」

「やるッ。」

次郎は、眉を上げるようにしていった。

「しかし、彼女の結婚式は、もう、すぐなんだろう？」

「だから、その結婚式場に乗り込んで、掠奪するんだよ。」

「花嫁掠奪か。」

平岡だけが、面白そうにいった。しかし、他の四人の顔には、とまどうものがないとはいえなかつた。

彼女、大塚左知子は、次郎より二歳上であつた。左知子は、次郎より一年下の大塚啓造の姉でもある。左知子は、次郎の母親に、お茶を習いに來ていた。

次郎が、左知子を本気で好きになつたのは、一年ぐらい前からである。彼は、啓造を訪ねるという口実のもとに、ときどき、彼女の家へ遊びに行くようになった。左知子も亦、次郎を憎から

ず思うようになった。二人は、いつしよに、映画を見に行つたりした。

左知子の家は、仲町で旅館業を営んでいた。

次郎は、左知子と結婚したい、と思いはじめた。左知子以外に、自分の妻とすべき女性は、地球上にいないのだ、と信じはじめていた。しかし、難点は、彼女の方が年上ということであつた。彼が、まだ、高等学校の生徒ということであつた。しかも、左知子は、すでに、適齢期である。そのことで、次郎が、日夜、悩んでいることは、五人の友達もすでに知っていた。

ところが、左知子の縁談が、急に、まとまつたのである。相手の男は、同じ北陸のF市の会社員で、名和竜吉であつた。会社の出張で、ときどき、T市へ来ては、彼女の旅館に泊つていろいろに、そういう結果になつてしまつたのである。名和家は、F市でも、名門に属しているのだそうだ。

次郎は、二度ほど、名和竜吉を見ている。苦味走つたい男であつた。しつかりした青年、との印象を受けている。次郎も、自分の感情を別にして、この竜吉を眺めることが出来たなら、この結婚は祝福されていい、と思つたであらう。しかし、次郎には、どうしても、そう思うことは出来なかつた。

次郎は、左知子のことを、あきらめよう、と努めた。必死になつて、その努力を重ねた。その

ため、一貫奴も瘦せた。彼の苦悩は、左知子の結婚式の日が迫ってくるにつれて、激しく、深いものになつて来た。

しかし、次郎は、自分の苦しみを、母親には、一言も喋つていなかった。母親が、左知子のこんどの結婚を、わが娘のそれのようによるこんでいることを知つていたからでもある。

「で、俺は、二日前に、彼女に会つて、何んとかならないか、としつように迫つたんだよ。」と、次郎がいった。

「彼女の答えは？」

「彼女も困つていた。じゃア、俺が嫌いなのか、というと、好きだ、名和よりも何倍か好きだ、だから、接吻だつて、してあげたじゃアないの、といった。」

「接吻をしたのか。」

「したよ。」

若い次郎の頬に、パッと、血の色が散つた。五人の友の表情が騒いだ。谷がいった。

「何回ぐらいだ。」

「そんなこと、聞くな。ただ、俺は、どうしてもあきらめられない、だから、こうなつたら君を掠奪するばかりだ、といったんだ。」

次郎の口調は、真剣であつた。顔がいきいきとしてかがやき、眼に光がくわわつている。五人は、その次郎の態度に、息苦しいような圧迫を感じて、固唾を飲んでゐた。じいつと、次郎の次の言葉を待ちながら、この男なら、どんなことでもやりかねないのだ、と思つてゐた。

「彼女は、しばらく、黙つてゐた。そして、大きな溜息を洩らした。」

「……………」

「最後に、俺の熱情が勝利を得た。彼女は、とうとう、いつてくれたのだ。すべてを僕の処置にまかせる、と。」

五人は、いつせいに、腹の底にたまつてゐた息を吐いた。

「問題は、掠奪の方法なんだ。」

「そうだよ。」

「彼女の家では、すっかり、結婚の準備が出来ている。名和家でも、そうに違ひない。そこへ、急に、彼女にこの結婚が嫌になつた、といわせることは出来ない。彼女もいい憎いだろうし、そんなことは残酷だ。かりに、いつても、彼女の両親は、問題にしないだろう。却て、警戒される恐れがある。俺が、自分の母親に頼んで、とも考えた。しかし、母親が、そんなことをしてくれる筈がない。俺が最後に考えたのは、いわば、クーデターだ。しかも、俺ひとりの責任において、